して彼處で木の根を掘て居ります、コンナ役にも立ぬ老人を御遣ひ下さるかと思ふと、出來ぬながらも一生懸命働かねばなりません、金『其方の働き方が勝れて居るにより、今日褒美として十五兩遣はす、』『勿體ない事を御仰ひますナ、コンナ大金をなんで私が貰へませう、一人前の賃錢を頂きますさへ勿體ないと思ふ位ゐ、夫では私の冥利が惡う御座います、』金『イヤ決して冥利は惡くない、此の金次郎は表面の働きを見て賞與をやるのではない、私が鍬を把つて覺えがある、開墾に木の根を掘る位ゐ骨の折るものはない、此方の平地の開墾は見る〳〵間に一二町きれいになる、伐木した跡の木の根を掘るは、いつまで過ても一ッ所をいぢつて居る、些とも仕事が捗取らぬ、然うして骨の折るは他の倍、今日は木の根はドレ位ゐ掘たから何の位ゐ開墾が出來ると云ふは此の金次郎チャンと心得て居る、正直な其方の眞心が天に通じて、此の金次郎の手より十五兩の金子を與へるのだ、此の金子にて老を養へ』と云はれて此の親父は涙をながし、『左樣なれば御言葉に從ひまして、之は頂戴いたしまする、有難う存じまする』と漸く受納めた、實に二ノ宮の活眼には恐れ入ります、と云ふは常州笠間在で、此の親父を根子の藤藏と云つて、木の根を掘らしては三人前も働くと云ふ、是を早くも見て取た二宮先生の非凡なる事は今更云ふも愚でありますが、實に恐れ入つたもので御座います。

第十三

茲に物井村に岸右衞門と云ふ者あり、兎角二ノ宮の仕法に妨げをいたしたものであるが、近頃に至つてスッカリ改心して、横田村の名主圓藏を證人として詫に參りました、『何うか今までの心得違は御勘辨を願ひます、失禮な申し分で御座いますが、是程偉い方とは思ひませんでした、今迄立派な御役人方が小田原からお出になつても物の五年と此の土地に辛抱した人は御座いません、夫故何に百姓上

りの貴下がドンナ事が出來るものかと存じて、失禮をいたしました、處が何うも貴下のなされ方は人間ではない、神樣のやうに思はれます、恁う云ふ方の爲る事を妨げしては、天の罰が當るかと存じますと恐しくなりました、モー私は今日から眞人間になりまする、此の通り圓藏殿を證人として一緒に連て參りました、是から先は貴下の御言葉に從ひ、何んなりともいたします、金『アー岸右衛門克く來でくれた、私は恁うして此處へ來て居れば、此三ケ村の人は皆私の子と思ふ實に可愛い、云はゞお前のやうなものはツマリ親不孝だ、然し親の目からは不孝な子が尙ほ愛があります、夫故お前が今まで何をしても、私は決して惡いとは思はない、

岸『夫ぢやア私を惡いと思召ませんか、アー有難う存じます、實に面目次第も御座いません』と是から岸右衛門が頻りに開墾地へ參つて働いたが、何うも人が信用しない、當人もがつかりして、

岸『先生、折角私が改心しても人が用ひてくれません、何か私が云ふと頭から鼻でおしらひ、馬鹿にして何うも私に眷づく者は御座いません實に殘念で、金『成程是は無理もない、永年お前の放蕩を知つて居るから、他の者は信用しない譯、なんと岸右衛門、是から一ッ目をさますやうな事をして信用を回復したら何うだ、

岸『恁うなれば何でも遣ります、火の中へでも飛込みます、御入用なら親の生膽でも持て參ります、

金『鳥渡しても然う云ふ事を云ふから困る、人の出來得る事を爲のだ、

岸『左樣で御座いますか、

金『其方の家の田地田畠有金等悉皆此の仕法の入用として差出したら宜からう、

岸『夫は先生何ですかへ、私の家に傳はる田地田畠殘らずですか、

金『左うぢや、家から家財までも差出すが宜い、

岸『夫は私は行るつもりですが、何んにも知らねえ老人や子供に苦勞をかけるのが……、

金『夫は心配するナ、他國の者さへ恁うして愛してやる二ノ宮、其方は今迄立派にくらして居たものだ、況して此土地の人、夫が路頭に迷ふと云ふを何で俺が見て居るか、

岸『よろしう御座います、家族に相談いたしまして御挨拶をいたします』岸右衛門歸つて此の事を母や妻に話をす

ると、一同呆れ返り、中にも母親は、母『コノ馬鹿野郎御先祖代々傳はつた田地田畠を賣つて、是から先何うなるか判らない開墾の入用に出す奴があるかヨ』女房も傍から口を出し、女『是は阿母さんの云ふ通り、お前さんの考へがよくないヨ』と云はれ、岸右衛門も仕方なく、横田村の圓藏の處へ來て此の話をして、先生へ斷つて貰ひたいと云ふ、仕方がないから其通り二ノ宮へ斷わると、金『アー然うかエ、ソンナ事だらうと思つた、然しケ樣な事は婦女子の與る處でない、自分の一心が誠ならば何でもない事、只目前の慾に迷ひ、其先は見えない、矢張り岸右衛門は岸右衛門ぢや、たゞ少し先より善なつたゞけ、小人は固より君子の行を履べからず、可愛と思ひアンナ者に大いなる道を敎へたのが過りであつたか』と恁う云つて後は何にも云はない、圓藏立歸つて此事を岸右衛門へ話した、岸『夫では先生は小人は君子の道を履べからずと御仰ましたか、シテ見ると是は矢張り自分の一心にあるのだ』とすつかり決心して今度母にも女房にも話さない、何處を何う駈けづりまはつたか、田地田畠家財まで賣り飛して百兩拵へた、夫を持て來て何うか仕法の入用に御遣ひ下さいと差出した、二ノ宮は快く之を納める、此事が知れると人々が驚いた、○『ハテナ岸右衛門が豪い事をやつたぞ、是は明日から御天當樣が西から出やアしないか、何も是は不思議』と自然と岸右衛門を尊むやうになる、當人も一心に働く、忽ち數町歩開墾した、此時に二ノ宮が、金『岸右衛門、宇津家租稅の法は五公五民で米が百俵收れば其方が高掛りで五十俵出さなければならぬ、つまりお前の收穫所は五十俵である、處が今度お前の開た此の田地は百俵上げれば百俵お前の有になる、稅のかゝつた田を投げ出して仕法の入用として人望を得、無稅の田を永くお前の有にしたら、是から先頗る利益であらう』と云はれ、岸右衛門は今更先生の深量遠謀に驚きました、實に是等は美談中の美談で御座います。

偖て天保四年巳年夏の始め、氣候不順にして霖雨歇時なく二ノ宮は天候を頻りに憂

へて居りましたが、或時膳部に對ひ歌子が夫へ出した、茄子の漬物、ヒョイと食して頻りに考へて居た、歌子は味でも惡かつたのかと思ひ、案じて問ひますと、

金『イヤ〳〵然うでない、何うも此の茄子が好味、』歌『何で御座います、貴下がむつかしい顔をして首を捻つて考へて居らつしやいます、妾は不調法で茄子が惡かつたかと大層心配いたしました、何うもうまいと云ふて考へるは不思議で御座います、』金『イヤ恁う好味つては困る、まるで此の味は秋の茄子だ、今夏の始めだと云ふのに秋の陽氣である、何うも今年は凶作らしい、何とか非常に備へなければならぬ』憂鬱の色面に現はれ非常に心配いたし、是から二ノ宮が櫻町三ヶ村へ布告を出した、今年は五穀は實らぬ、凶作の供へをしなければならぬ、依て一戸毎に畠一段歩、其貢税を免す故、早々稗を蒔、然うして今年の飢渇を免れなければならぬと云ふ、是を聞くと陣屋へ宗兵衛善兵衛三平岸右衛門圓藏がゾロ〳〵入れ代り立代りやつて來た、○『何うも先生樣、是は困りましたナ、稗を蒔と云ふのは、戸毎に一段歩づゝ稗を作つた日には三ヶ村山のやうになつてしまひます、ソンナに貯へた處で爲やうが御座いません、』金『何でもいゝから作つて置け、仕方がないから面々稗を蒔たが、三ヶ村戸毎に一段歩づゝと云ふので大層出來た、スルト其年夏の盛りにチッとも晴空がない、雨ばかりビショ〳〵降て寒いのなんのと襲衣をする始末、彌々秋になつたが關東は大凶作、バタ〳〵行死人がある、ソコで名代の荒地と云はれた櫻町は昔であつたら一番先に餓死するものゝあるべき筈だが、此凶作に當つて一人も飢渇に迫つたものはない、是が稗の貯へがあつた故、始めて村民、先生の卓見に驚いた、スルと其翌年再び二ノ宮が令を出して、遲くて五十年早ければ三四十年の間には必ず凶荒がある、天明度以來モー一兩年にして凶荒の來るべき容子がある、今度の飢饉は容易ならぬ事と思ふ、依て稗の用意をしろと云ふ、先に敬服して居るから今度は我れ先にと互に競つて稗を貯へる、三ヶ年畠の貢税を免してくれたから、皆喜んで稗を貯へました、凡そ千石ば

かり貯へた、スルと天保の七年申歳、五月から八月にかけて恐しく寒くて異夏に、綿入を衣ると云ふ騒ぎ、イヤ天明の凶年よりもモッと甚だしい、道路には行死人が重り合ふと云ふ、其中で櫻町ばかりは此難を免れました、此時に二ノ宮先生は、三ケ村を戸毎に廻り、無難中難極難の三段に分ち、老幼男女を問はず、一人に就て雑穀を交へ五俵宛くれた、一戸五人なれば二十五俵、十人なれば五十俵、凶年でありながら貧乏人は豊年より儲かつた位ゐ、然し是でいっと油断をしてはいかんと戒めて、凶年の用意をする、偖て二ノ宮先生の盡力に依て荒蕪は開墾して、青青とした田地が見え、十年の後には曾て小田原侯に申し上げた如く、二千石の櫻町は領地となりました、八百石より上らぬ處を二千石にしたのは先生の誠心のいたす處で御座います。

第十四

三ケ村の人々は二ノ宮を神の如く思ひ、大久保侯と約束した十年過たが是非此處に踏止つて彌々此土地の盛大になるやうに土場を堅めてくれろと云ふ、二ノ宮も自分が歸つた後が案ぜられるので當分茲に居る事になる、或日五助と云ふ門人が、

五『申し上ます只今立派な侍が御出になりまして是非先生に御面會を致したいと申しますから何方であると質ましたら、相馬中村の生れで富田高慶と申すもの永らく江戸の聖堂で居つたと云ふ、相應な學者の御方と御見受申しました、

二『アー然かへ、イヤ何うも然云ふ者に會て居る暇がない、夫に俺は者學と僧侶は大嫌ひ何とか云つて斷わつて貰ひたい、

五『デスけれども折角御出になつた溫和品の善……、

二『何でも叶ん、

五『ヘエ、然し先生、何故僧侶と學者は叶ません、

二『夫は不可と云ふわけでもない、私は今の僧侶と學者は嫌ひだと云ふ、世の諺にブルなラシクスルと云ふ事がある、學者は學者らしく爲なければならぬ、又僧侶は僧侶らしく爲なければならぬ、侍は侍らしく、醫者は醫者らしく爲たいも

のだ、當今はラシクでなくて、ブル方が多い、學者ぶつたり醫者ぶつたり俳句ぶつたり、侍ぶつたりしては困る、譬へば他から貰つた牡丹餅を自分が拵へたやうな顏付をして他人に遣ると云ふのが俺は嫌ひ、又他人の話を自分の話のやうにして物語ると云ふやうな奴が、此金次郎は大嫌ひ、ソンナ類が多いからソコデ今の學者と今の坊主は大嫌ひと云ふのだ、而已ならず多用で會て居る間が莫、　五『へエ』五助が出て來ましたが、　五『何うも御氣の毒樣で御座います、何と云つても二ノ宮が多用で、御目にかゝる間がないと申します、依て御斷わりいたします、

高『左樣かの、然らば何日參つたらよろしからうか、　五『夫が何時御出になつてよろしいか判りません、隨分貴下のやうな方が入來るが、いくら待て居ても冗で御座います、　高『何うあつてもいけませんかナ、某は元來相馬の家臣で江戸に十年も居りまして聖堂にも入門いたし、何とか富國安民の策を講じたいと存じ居る處、二ノ宮先生の圖らず御高名を承はり、責て二三年其下にあつて御高說を承はらんと、江戸よりわざ〳〵此邊鄙なる櫻町へ參りました、衣服書物等を賣代なして旅費に當漸く此處まで來た、其熱心なるを御酌下すつて御面會下さるわけには相成りますまいか、只一言の下に面會を謝絕するとは御情けない事で御座います、何とか一ッ貴下の御盡力を以て、切なき拙者の胸中を御明し下されて御面會を願ふわけには相成ませんか』五助は元來好人物で眞に氣の毒と思ひました、　五『折が御座いましたら申し上げませう、何うも一旦云ひ出すと後へ退ぬ先生、中々面倒で御座います、一體私も此所に寢泊はいたして居りません、此物井村に鳥渡した家を借て居りまする、其私の住宅の向ふにイヤ破れた小屋のやうな家が御座います、其所へ御世話をいたしませう、少の間其所に待て御在なすつたら宜う御座いませう』五助が親切に世話をして自分の家の筋向ふ恰當汚い空家がある、其家へ入つて高慶はホンの雨露を凌ぐばかりだが、近所の子供を集めて讀書の指南をして二ノ宮に面會する日を待て居た、隨分氣の永いはなし、スルト二ノ宮先生も決

して高慶の名を忘れたのではない、心中に富田高慶と云ふは刻み付て居り乍ら眼が無から會ない、隨分兩方とも根が善、或時物井村に兼藏と云ふものがあつて、元來無賴な奴、スルト二ノ宮の門人五助が其家の前を通行した時、便通を催したので、其兼藏の家の便所へ入らうとした、田舍は然う云ふ事は自墮落で、誰の家の便所でも通行の人は其所へ入る、其所の家も詰り肥料が獲ると云ふので別段苦情も云はない、今五助が斷わりもしないで、其便所へズット入つた、スルトモー柱が曲つて居て棒で恁うさゝへてある、五助が何うした事かドント板目に突當つたので、メリ〳〵ドント横に此便所が倒れた、五助驚いて表へ出た、トウ〳〵此便所の屋根は勿論殘らず倒壞てしまつた、是は困つたと五助が茫然看て居ると、其所の主人の兼藏が出て來て、兼『ヤイ誰だへ、俺の内の便所を破壞しやアがつて、汝か、太エ奴郎だ』と破鐘の樣な聲を出す、五助は驚いて逃出す、兼『汝逃やがつたな』と六尺ばかりの棒を持て追駈て來る、五助は彌々驚いて二ノ宮の居る

陣屋へ逃込んだ、兼藏は玄關先へ六尺棒を持つて突立上り、兼『サア俺の便所を破した奴はコヽの五助だ、之へ出せヤイ、出さねへか』あんまり騒が大きいから陣屋の者が其所へ來て、○『マア〳〵靜になさい、兼『靜も何もあるものか、五助を出さなければ奥へ踏込から然う思へ、○『デモ御座いませうが、兼『何を吐しやアがる、汝等が心を併せて俺に損失を付やアがつたのだらう』棒を取直して一人の頭を撲つた、○『是は亂暴、兼『亂暴も糸瓜もあるものか』其儘奥へ踏込ふとする、二ノ宮が夫を聞てズット玄關へ出て來て、二『イヤ誰かと思つたらば兼藏か、何で其方はソンナに怒つて居る、兼『あの五助が私の家の便所を破して逃出したから勘辨が出來ねヘンで、二『イヤ夫はお前の怒るのは無理はない、然しさうもろく雪隱が破れるやうでは母家も矢張り古くなつて居らうがナ、兼『それは古くなつては居ますが、ソッとして置ば破れやアしねへ、五助が來やアがつて突當つたから倒壞つたので、二『イヤ直に建てやらう、序に其母家も建てやらう、

心配するナ、』『兼』『へエ、』『雪隱は勿論、母家まで新しくなれば却つて五助がお前の恩人ではないかアハ、、、』と二ノ宮が笑つて、是から自身に出かけて兼藏の家を見分して間口三間奥行六間の家を建、便所も別に建てやる、サア此家へ入れと云はれたので兼藏はイヤ何も不思議〳〵、今更六尺棒を持つて陣屋の玄關へ立上り大きな聲で怒鳴つたのは面目次第もない、アー二ノ宮先生は有難いと、コヽデ好な酒も廢て、放蕩無賴と謂はれた兼藏が生れ代つたやうな善良の人間になりました、サア夫を聞て他の人が、○『兼藏め僥倖な事だ、何うだへ五助さん人助の爲に俺の便所を破して下さらぬか』然破した度に新しく建ては大變、スルト奥州浪人で田口源吾と云ふもの、櫻町の陣屋へ來て食客をして居りましたが此事を聞て、頻りに異議を稱へて居る、當時手習師匠をして富田高慶といふが心安くなつて今日も訪ねて來て兩人で茶を呑ながら雜談の後、『富田殿貴公は相馬の御家來で相當の御食祿を領られた方である、拙者も以前は相當の祿も領じたもので、當時浪人して當所へ來たり、二ノ宮先生の下に書記をいたして仕法を手傳て居るが、實に先生の行には感服する事が多いから、拙者も恐れ入つて居つたが、今度の兼藏の雪隱の一件はチト感服が出來ない、アレハ兼藏の棒が恐かつたと見える、アレでは強い者勝だ、二ノ宮は棒で脅迫すれば、何でもしてくれると云はれても一言もない、實に何もアー云ふ無法者に家を造つてやるのは以の外だ、是は大道に非ずして小道である、何故小道と云ふかと申せば、兼藏一人であつたから家も作つてやつたらう、若萬人であつたら其萬人へ家を作つてやる事は出來まい、シテ見ると是は小道で大道でない、高慶先生、何と御考へなさる』定めし此議論に贊成であらうと思ふと、富田は頭を掉つて、『コレハ田口氏の御言葉とも心得ぬ、拙者は今度の事を承はつて蔭ながら敬服して居つた、と云ふは人を導くは先に敬べて然して肯ざれば之を刑する、刑は惡を消す道具である、先生只今まで一人も刑せずして皆之を善に歸せしめた、然らば兼藏に家を建て遣はしたも始めに人の

道を敎へたのである、アー云ふ無敎育な者は恩を以て懷けるが第一、一度彼を懷けて改心すればよし、若し改心なさゞれば之を刑す、今象藏が先生の恩に感じ改心して善人になつたは眞に結構な事である、一人の惡を化して三ヶ村の民が皆な歸服すれば是大道である、アー恐れ入つた』と云はれて田口は閉口する、シテ見ると田口源吾より高慶が一段見識が高かつたと見えます。

偖二ノ宮は、　二『五助先日富田高慶と云ふ人が來たがアレハ何ういたした、　五『當時手習師匠をして半年程待て居ります、折を見て申し上げやうと存じて居りましたが毎日折がないので其儘にいたして居りました、二『今日は會て見たい、　五『御會下さいますか夫は嘸喜ぶ事で御座いませう、飛が如く五助は富田の所へ違つて來て、　五『サア高慶殿、漸く貴下の願ひが叶ひました、私と御一緒に御出なさい、

高『夫では先生が御會下されると、夫は千萬忝い、然し大人に御目にかゝるは自分に證ある事で、袴羽織の調達を……、　五『イヤ夫が不思議、私が此方へ參る時に此包みを持て參れと慫う被仰いましたが少し御待なさい』と開て見と羽織袴が入つて居る、『イヤ先生は屆いて御在なさる、夫と云はずに羽織袴を渡してくれました、　高『夫は忝い、どりや御同道いたさう、是から羽織袴を着して五助と共に陣屋へ來る、驚て始めての面會、富田高慶が二ノ宮を見ると何となく其人の威嚴ある姿に自分が惚た、妙なもので人は始めての會見に大概其人物の價値は判るもの、大きな頭で色の赤黑いデップリ肥つた目のギョロリとした鼻のツンと高い口のしまつた何となく犯すべからざる二ノ宮の風采、相變らず手織木綿の衣類を被て居る、富田高慶は袴羽織で其席へ進み、　高『偖始めて御目にかゝります、拙者は相馬の出生富田高慶と申しまする、御繁忙の所御會見を御許し下され忝存じます、　二『是は申し遲れた、二ノ宮金次郎と申す見かげもなき一農夫、御丁寧なる御挨拶では却つて恐縮、偖五助から承はつたが江戸に十年も居られて聖堂にて學問を爲されたと云ふ、此金次郎は鋤鍬を把る事は詳存じ居るが、學びの道は眞に疎

い、時に貴下へ御願ひするが、何と豆と云ふ字を書て見せては下さらぬか』是は俺を試すのだと思つて、固より書は自慢の高慶、忽ち豆と云ふ字を認めた、實に能出來た、文字は總て其人の氣の現はれるもの、書は姓名を記すに足りとはアレハ項羽だけの考へ、實に書の善のは其人が奥ゆかしく見えます、男子の筆蹟と婦人の裁縫と同じ事、今高慶の書た文字が如何にも能出來た、五助も傍で感心した、富田先生は偉い自分も紹介したゞけの功があると喜んで居る、スグと二ノ宮へ豆と云ふ字を書たを出すと金次郎が觀て居たが、二『五助、烏渡藏から豆を一掴み持て來てくれ』聽て五助の取出した一掴みの大豆を掌へ載て二ノ宮が、二『富田氏拙者の豆は是ぢや、成程尊公は學者だけに大層立派な文字が出來た、幾ら能出來て其豆は馬は喰ぬ、此金次郎の豆は馬も喰し、其他の用をも爲す』と恁う云つた、高慶此一言でウンコ、ダ成程豊の上の尻理屈は國家を救ふ事は出來ない、議論は實行に如ずと深く感心した、是とても相手が惡くつては恁うはゆかない、相手が

高慶先生であつたから是が判つたので、高『何卒御門人として御薫陶を願ひたい』と是から二ノ宮先生の傍に居りました。

第十五

茲に野州烏山三萬石大久保佐渡守の領地は人民が遊惰で村々は廢戸多く荒蕪の地多く貢税が減て上下の困難一通りでない、其大久保侯の菩提所で天性寺と申して其住職が圓應と云ひ名僧であるが、何うかして荒蕪を拓き人民を救ひたいといろ〳〵苦心したが、其内に天保の七年申歳の凶荒、彌々民は飢渴に迫る、圓應和尚が考へたは、當所より十三里離れた芳賀郡櫻町に二ノ宮金次郎と云ふ先生が居られて、アレ程の寒村を再興したと云ふ、此の饑饉に當つて一人も飢渴に倒れたる者がないと云ふ、此人に會ふて民を救ひ荒蕪を拓く仕法を質ねたいと烏山の老臣菅谷忠左衛門と云ふ者に圖つた、菅谷も、菅『イヤ拙者も二ノ宮先生の高名を

聞て居る、宜しく頼む』と云はれ、圓應和尚は草鞋がけで廻て櫻町の陣屋へ來つて二ノ宮先生に御面會して御願ひ申したいと云ふと、取次は相變らず五助であつた、是は不可、先生は坊主と學者は大嫌ひ、何うも嫌ひなものばかり來るのは不思議である、然し捨置わけにもならぬから此事を取次と、二ノ宮が云ふには、二『偖五助、お前から能云へ、云ふ事が間違つてはいかんぞ、僧侶には自から僧侶の道がある、我が行ふ所は破れたる村を興し民を安んずるに在、然らば佛へ仕へる僧には用のない身上、道が違ふから、會つて談ずる暇がない、速かに歸るが可と恁う云ひなさい、五『ハイ』五助が此事を云ふと圓應少しも騷がず、四『成程我は佛門の者である、然し其志は民を撫するに在、只今烏山の民は飢渇に迫つて居る、是を見に忍びず遥に先生の高德を聞、御訪ね申した次第、何卒民を救ふ御策あらば御教下されたし、先生が許さぬと云ふて是から手を束ねて烏山へ歸れませぬ、何分教へを垂給はん事を願ひます』五助は仕方がないから其通り復命すると、

二『何を其坊主申し居る、夫だから今の坊主は俺は嫌ひだ、モー一度貴樣行つて來い、二ノ宮は二ノ宮が預る所の勤めがある、烏山の民の安否は其領主の職分である、職分違ひの金次郎が夫を聞道理はない、別て僧の身としてコ、まで推參して強て面會したいと云ふのは此二ノ宮の事業を妨げる段言語同斷、モー一度此通り云へ』五助が又圓應に通じると更に驚かず、四『左樣で御座るか、然し我が進退は烏山領民全體の命にかゝはれり、先生が若し御會下さらねば此所を去りません、飢て以て民に先立て一命を捨る決心で御座る』と其儘陣屋の門前なる芝原に袈裟衣のまゝ着座いたし眼を半眼に閉て晝夜動かない、スルト夕景からして雨がポツポツ降て來る、夜に入に從つて雨は彌々強く、殊に雷鳴はげしく、ガラ〳〵、ドウーと云ふ大雷雨、五助も呆れてしまひ、其日は自分の家へ歸り、翌日陣屋へ來るに就て、定めし圓應は何處へ行つてしまつたらうと思つて見ると、平然と芝原に座して居る、意外の事に驚いて、五『先生、二『何だ、五『昨日先生へ申し上

ませんで御座いましたが、烏山の僧は貴下に御目にかゝつて教へを受ぬ内は、こゝは去らんと申して、門前の芝原へ坐り込で、昨夜の雨や雷にも恐れず未に坐り込で居ります、如何にも氣の毒で御座います、何と會つてやつたら如何で御座いますと、二『未だ居か悪い奴だ、彼の僧理非にかゝはらず強て面會せんとなし剩へ陣屋の門前に餓死せんとは先例なき曲者なり、此上は我が逢て之を誡め退かしてやらう、茲へ連て來い』五助は即應の着座いたして居所へ參つて、五『兎に角御坊へ先生が逢と被仰るから私と一緒に御出なさい、四『左樣か』悠然と立上つた圓應和尚、案内に從つて二ノ宮の前へ來ると、二『如何に其所なる坊主、汝何が爲に此陣屋へ來たつて我が事業を妨げるか、第一門前にて餓死するとは何の譯だ』圓應靜かに頭を擧、四『是は〳〵二ノ宮先生、始めて御面會いたした、恐僧此所へ參りたるは他の事では御座らぬ、先生の教へを受て烏山に餓たる民を救はん爲で御座る、二『汝は僧侶に致して佛の道を知らざるか、四『是は又異な御質ね、我恐かなれども佛門に入る事久し何で佛の道を知らずに居りませう、二『然らば佛の道に荒蕪を開き民を撫し、又民の餓るを救はんとする道があるか、四『成程仰せの如く、事は異る如しと雖も抑も佛の本意は衆生濟度を爲るに在、民を憐み飢を免れしめんとする事が何ぞ道にあらざると云はれませうか、二『是汝が一を知つて二を知らざるなり、人各々職分ありて相奪はず、領主には領主の道あり、臣下には臣下の道あり、僧は僧の道あり、領主にして臣下の道を行はゝ人君の道廢れ、國家を保つ事は出來まい、臣として君の行を爲さば、僭上暴賊の行となりて、國の亂是より生ぜん、又領主として佛者の行をなさば何を以て民を治めんや、佛に仕へる身を以て國君の道を行はんとするものあらば之を何とか云はん、今汝僧の身として國君の道を奪ひ、之を行はんとするか、所謂民を治め荒蕪を擧げ、百姓の飢渴を救はんこと、是人君の職ではないか、然るに烏山の君臣之を救はん心なく、座して領民の飢渴を見んとするか、將之を救はんとするか、元より汝の與

るべき事でない、其與るべき事にあらざることを以て己れが任となし、他國まで參つて我に談ぜんとす、是僧侶の職分に非る事なり、汝が務めたるや、凶歳未だ至らざるに當り天地へ祈り佛に誓ひ國民の平穏を禱り、五穀豊にして上下の安泰なるを願ひ、此の如く凶歳の憂を免かれしめ、國土の無事を祈念するこそ、是佛者の先務濟度の大なるものと云ふべし、汝が勤め行ふべき事を忘り、此凶年に當り、國君の道を私し飢たる民を救はんとの念を發し、力足ずして又我に其道を求めんとす、是佛道に非ずして汝の意を立て、名を釣り譽を求むるに當れり、其志不善に出ずと雖も其行ひ大に道を失ふたり、汝誠に民を救はんとならば、何故領主へ告ざるや、告ると雖も國君怠にして救ふ事能はずんば是も亦命なり、如何ともすべからず、責て佛へ祈り我が門前に飢んとするの所行を汝が寺にて行はゝ是にて汝の職は遂たりと云はん、此の如く行ふべき道を廢し、汝の任に非る事を圖り、佛意に叶へりと云ふ、豈之を佛の道を知れりと云はんや、猶言ふべき道あらば云へ』と天地にひゞく大音で說示されて、圓應和尙は歎息して默然といたして居る、二ノ宮は之を見て、　二『速かに歸れ、我撫育の道に暇なし』と其儘ッ、と立て奥へ入る、圓應和尙は『アー我過ちたり、かゝる大人物と知らず失禮致したり、アゝ恐れ入た』と二ノ宮の後を三拜して夫から烏山へ歸りました、此の事を烏山の重役菅谷忠左衞門に一部一什の話しをいたしました、菅谷も大いに感じて成程驚き入つたる二ノ宮先生、よし此の上は拙者が速に參つて、救助の道を求めやう、然し是も順を以て行かなければ、臣として君の道を行ふと云つて又斷られるに違ひない、兎に角我君に申上げやうと是から菅谷は衣服を改め御前へ出て、　當『僧て今年は五穀實らず、領民の一命旦夕に迫り居ります、私百方撫育の道を求めまするが、其の道を得ず、平常君の用度足らずして、出入町人より財を借り之を補ふ、今凶作に當つて金銀融通の道絶え、如何とも致す事が出來ません、然るに當國櫻町に二ノ宮なる者住し、彼は其先小田原侯の選擧を以て彼の地の廢亡を再興する

爲め罷越し、十年にして其の功業歴然、而のみならず饑饉の至らん事を前知し、豫め其の備へを爲して三村の民を救ふ、某密に人を遣はし彼を試みたるに其議論正確にして非凡の人物、當時得がたき賢才と存じます、依て某彼の地に罷越し、彼に面會いたして、救荒の道を求めんと存じますが、私の心に出たりと申せば必ず面會を免しますまい、何卒主君の御賢慮を以て御懇ろなる直書を二ノ宮に賜ひ、私夫を以て彼の地に至り君の思召を告げますれば、彼も君の御仁惠厚きに感じ、必ず此の凶年を救ふ良策を敎へ呉れるで御座いませう』と申上げる、烏山侯之を聞れ、尤もであると速にお直書をお遣はしになる、菅谷忠左衛門之を持て櫻町に參り、二ノ宮に面會して其書を差出し餓たる民を救ふ策を問ふ、二ノ宮先生歎息して烏山の民の事は吾與る處でない、今飢渴に及べるは君臣共に其道を失ひたる故である、然るに君臣其非を識り、民を救ふ策を吾に問ふ、今は烏山領民の存亡吾れ一人の言下に決せり、之は救はずには居られまい、殊に烏山侯は小田原侯の御親屬であれば、救助するの緣故なしと云ふべからずと、斯く決心いたし、菅谷に對つて、

『烏山侯仁心厚く、救ひを某に求め給ふ、某は見るかげもなき野人であつて、中々天下の諸侯の領内の事務を執るべき身分にあらず、然れども烏山侯は我が主君の御緣者である、依て烏山侯より我が主君へ此の事を告げ給はば必ず主君より某に命ぜん、然れども此の手續を履めば、日數がかゝる、餓たる民を目前に置て此の順序をおはゝ、謂ゆる轍魚を市に求むるの癡ひなしと云ふべからず、其内先づ之を以て切迫の救荒に當てたまへ』と二百兩夫へ出して菅谷に與へました、忠左衛門三拜して此の金を受取り烏山に歸りましたが、一兩の融通も絶たる時に二百兩の金を得たので御座いますから、夢のやうでありました、之を以て一時民を救ひましたが、中々天保七年の饑饉は容易でない、二百兩で一時救ふに止つて永遠に人民を救ふ事は出來ない、ソコデ菅谷忠左衛門より、主人佐渡守の依頼の狀を添えて大久保加賀守忠實侯へ願ひ出でました、其趣意は二ノ宮

を借りて凶荒を救ひたいと云ふ事、大久保侯氣の毒に思召し、直に二ノ宮に御沙汰になりましたから、ソコデ金次郎が、金にして二千兩計りの米粟を烏山に贈りました、何にしろ其時分の二千兩の價格ある米粟とて、十四里の間馬が續いたと云ふ、烏山の人民は喰ふ事が出來ないから、市中の物持の家を打ち毀し、金銀米穀を引出し、狼藉を働きます、城中に於ては偖は彼等亂入するやも知れん、若し來たら大砲を以て之を射拂へと云ふ騒ぎ、處へ二ノ宮の贈りました米と粟、天性寺境内に十一棟の小屋を造つて、貧民に粥を與へました、之を手始めに諸方で炊出しをいたしまして救ひましたから、烏山の領民の喜びは一通りで御座いません、ソコデ烏山の君臣一同二ノ宮に此の後の用意を問ひました、金次郎懇々今まで經濟の過れるを指摘し、ソコデ舊來の荒蕪の地を開く事二百二十四町、年々二千俵から米が收るやうになつた、『烏山侯何萬の廢田幾萬の借財ありとも、三萬石の外に二千石宛年々米を得たならば、其の借財の返らぬ道理はない、只此の上は三萬石は三萬石の分度を守るべきが肝要である』と申しましたが、實に名言で御座います、大久保加賀守は二ノ宮金次郎を江戸へお召しになつて、千石を與へんと密に人を以て申されましたが、金次郎是は辭退いたしました、只此の二ノ宮先生の不幸と云ふべきは、領主大久保忠實侯天保七年十二月より病氣で、翌年御逝去あらせられたのが、二ノ宮先生の一の不幸で御座いません、此の方が御繁昌でありつたなれば、モッと豪い事をした人で御座います、後には德川公儀より召し出して、日光山水田の儀に就て非常に先生が骨を折られました、安政三年十月七十歳を以て病死いたしました、相州小田原に其靈を祀り、之を二ノ宮神社と云ふ、明治二十四年十一月朝廷特に從四位を贈られました、躬踐實行の大偉人二ノ宮尊德先生の傳是にて大尾といたします。

尙ほ此の講談は波瀾が多う御座いまして、中々喋舌るに困難で御座います、ソコデ材料は富田高慶先生の報德記を骨とし、家庭學校長留岡幸助先生の二ノ宮翁

逸話、幷に相州湯元の福住翁の報德夜話等を參考書とし、又先年留岡先生と同道して、柏山村へ參りました節、面會いたせし二ノ宮兵三郎、二ノ宮長太郎兩氏の直話を折衷し、夫に講談の味を附けまして、斯くは口演いたしました、未だ申上げる事が澤山御座いますが、此の邊をもつて終局といたします。

（浪上義三郎速記）

二宮尊德翁 終

燕林作歌

二宮尊德先生（琵琶）

蛇は寸にして其氣を現し、栴檀は兩葉にして香し、可なるかな尊德二宮金次郎、少年にして家產傾き、父に別れ母を失ひ、先祖傳來の田畑は、酒匂の川の河水に押ながされて石瓦、跡を埋めて形もなし、殘るは二人の幼き弟、柏山村の茅屋に、涙の雨を灌ぎけり、百折撓まぬ金次郎、粉骨碎身難行苦行、小夜更て人の眠れるそが中に、くらき火陰に書繙き、不毛の河原に鍬を入れ、人の捨たる苗を植ゆ、心の誠天に通じ、絶なん家を再興せり、續いて至誠勤勞實行、正に倒れん服部家を救ひ起せし推讓報德、小田原藩公聞し召し、人材登用此時と、櫻町興復をぞ命ぜらる、月に村雲花に風、ねたみそねみに四面楚歌、二宮更に驚かず、泰然自若職に就く、邪は正に敵しがたく、荒にあれたる櫻町、再び花咲く春の日哉、實の秋ぞ賑ひて、土中の名玉世に輝き、其後の功德數知れず、されど自から富榮を求

めず、窘窮屈辱意に介せず、清き心に苦悶なく、晴れ渡りたる愉快さは、王侯も亦奪ふべからず、後神に祭り朝廷正四位を贈らせ給ふ、末世に殘る報德二宮神社、國の礎世のかゞみ、人は斯こそありたけれ、人は斯こそありたけれ、

明治四十三年九月廿六日印刷
明治四十三年十月　日發行　二宮尊德翁
（實價金四十五錢）

著作者　東京市日本橋區通四丁目五番地　桃川燕林

發行者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　和田靜子

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　中野鉄太郎

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
電話本局五十一番
振替口座東京一六一七

◎日本著作權法◎
◎日本出版法◎
內に發行者
なきものは偽物
◎日本著作權法◎

毎月一回

探偵文庫

第壹篇再版　美人狩　『附』五人の生命
第二篇再版　血染の釘　『附』手形の賊
第三篇再版　十文字　『附』女の死骸
第四篇再版　電氣の死刑　『附』殘菊
第五編　四本指　『附』船中殺人
第六編　鳴神組　『附』怨の片袖
第七編　活人形　『附』やれ手紙

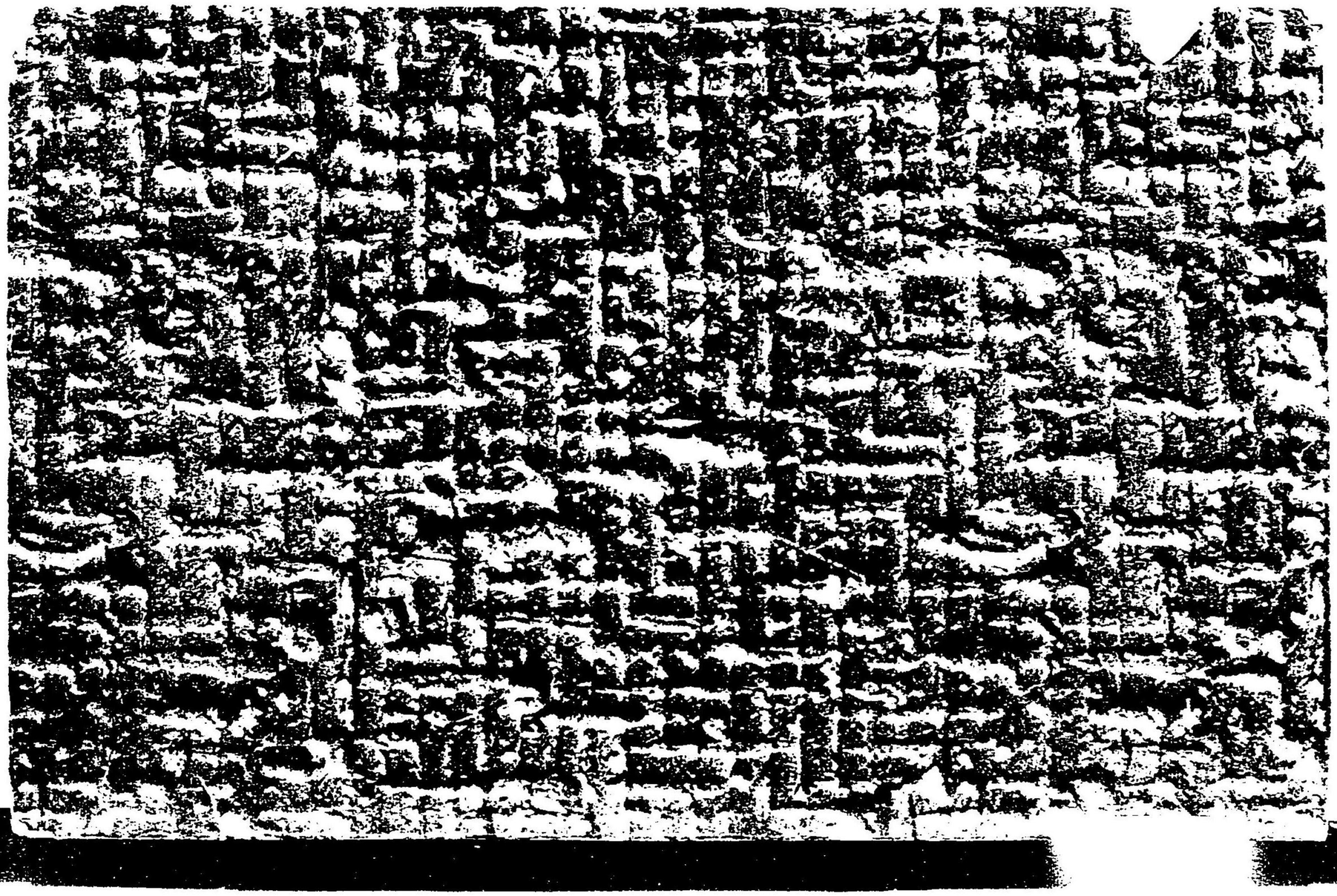
以下續刊

本書は立案新奇毎冊讀者の心膽を寒からしむ。匿名の著者は果して何人？滿都の好奇心を萃めて毎冊賣切の盛況を極む。

袖珍新型頗善美
毎卷一冊讀切
實價各三十五錢
郵稅各金四錢

東京市日本橋通　春陽堂　振替東一六一七

264
354



097482-000-3

特10-273

二宮尊徳翁

桃川　燕林／口演

M43

DBS-1392

264

354